

周辺視野における通知の運動方向が 気づきやすさと作業への集中に与える影響

奥埜 翔太

グローバル化が高まる中、リモートワークの需要は急速な高まりを見せている。リモートワーク中にはチームのメンバーとも綿密なコミュニケーションをとりながら、個人でも集中して作業を進める必要があり、個人作業中に他者とコミュニケーションをとる方法として通知が使われている。作業中の通知は作業の妨げとなるため、作業者へは通知の情報の重要性に応じ、その気づきやすさを簡便に調整するための通知環境が必要となる。しかし、現在周辺視野に提示される通知で有用な通知の方向は判明していない。そこで本研究では、二重課題における通知の動きが作業効率、主観評価に対して及ぼす影響を検討し、有用な通知方向を検証することを目的として実験を行った。

この目的のため、実験では瞬時条件・水平条件・下降条件・上昇条件の 4 条件で通知の動き条件ごとに通知の気づきやすさを測る気づき課題、作業への集中しやすさを測る暗算作業課題双方の正解率、正回答率を測定し、気づきやすさ感等の主観評価計 7 項目で構成された VAS による回答を求めた。

分析を実施した結果、気づきやすさと作業集中性の両面で課題成績と主観評価が高くなり、これらの行動指標と心理指標の間に正の相関がみられる通知の動き条件は存在しなかった。また、水平方向へ移動する通知が視認ミスを低減する一方、他の課題への妨害となる可能性があることが示唆された。そして、瞬時に表示される通知は他の通知方法に比べ精神負荷を伴い、そのコストによって行動指標上の気づきやすさを向上させている可能性、通知に気づきやすい場合に作業に集中でき、そのときの主観評価が高くなる可能性も示唆された。

これらの結果より、特定の通知方法が通知の気づきやすさや作業への集中を高めるわけではなく、通知の方法ごとにそれらへ異なる影響を与える特徴がある可能性が示された。(応用認知心理学)